

5) アサとカラムシ=麻と苧/紵/紵麻

アサはクワ科アサ属の一年草で普通は大麻のことをいう。原産地は中央アジアで人類が繊維をとるために真っ先に栽培した植物の一つである。茎は四角柱で高さ 3m に達し、上部で枝分かれして葉は掌状に深裂し縁には鋸歯がある。雌雄異株で夏、枝先に円錐花序を出して、淡黄緑色の雄花をたくさん咲かせる。雌花は苞葉に包まれて葉腋に集まり、短い緑色の穂状になる。この仲間には大麻の他に亜麻、紵麻、黄麻などの強靱な繊維を持つ植物が多く、いずれも茎の繊維は糸や布地に加工されてきた。和名の由来はアオソ(青麻)の転じたものと言われている。別称としてカラムマ、イト、オ、シタソ、アサキなどと呼ばれ、学名は『*Cannabis sativa*』で、イギリスやアメリカではマリファナ『*marijuana*』、インドではガンジャ『*ganja*』、アラビアではハシーシ『*hashish*』である。現在の産地はインドと東ヨーロッパ諸国で、特に旧ソ連邦のカザフスタンやウズベキスタン、キルギスなどを合わせると世界の 8 割を生産している。日本では栃木県や長野県が主な産地である。

麻の栽培は古く紀元前 2000 年頃には、ボルガ河流域のスキタイ人が最初に利用したといわれている。この頃は栽培下にあったものかどうかは不明であるが、やがて近隣諸国に伝わり、前 5 世紀ごろにはギリシャでも栽培されていたと見えて、ヘロドトスも記録に残している。しかし栽培はあまり広がらず、古代エジプトやローマでも普及することはなかった。むしろ前述のごとく、後にインドからもたらされた綿が、繊維植物の主流となり、麻は葉としての役割のほうが大きかった。中国では前 5 世紀ごろに著わされた『書経』にその名があり、6 世紀ごろの『齊民要術』には繊維用と、種子油用の植物としてその栽培法などが記されている。漢方では成熟した種子の中の仁(ジン)を『麻子仁』(マシニン)といい、脂肪油を多く含み、緩下、利尿作用があるために、便秘や腹水の治療に用いた。また大麻には麻酔性のテトラヒドロカンナビノールを含み、幻覚作用があることから、宗教などでは快楽や幻覚剤として用いられ、医療では麻酔薬として利用されてきた。麻は産地によってテトラヒドロカンナビノールを、含むものと含まないものがあり、インドのものは特に多く含んでおり、日本産のものはほとんど含んでいない。しかし江戸時代には麻の芽を食べて、幻覚症状を起こした話も残されている。インドではこの茎の分泌物や開花した雌株の頂部を、乾かして煙草のように吸う習慣があり、イスラム教のアサシン派は敵を暗殺するのに、大麻の吸引者を敵方に送り込んだともいわれており、これは英語の暗殺者を意味する『*assassin*』の語源にもなっている。

日本に麻が伝わったのは有史以前に遡ると思われ、奈良時代には栽培が奨励され、7 世紀以降には国家的規模で栽培が行なわれていた。このため古くから文献にも登場し、『万葉集』には「真麻」「苧」「安佐」「麻」「麻苧」などとして 30 首余りが見える。

小垣内(カキヅ)の麻を引き干し妹なねが 作り着せけむ白袴(シロハカマ)の紐をも解かず

この歌からも当時すでに麻が栽培され、布地にされていたことがわかる。

このように麻の茎の繊維は糸や布地の材料にされたが、皮を剥いた残りの『麻殻』(オカラ)はカイロの灰の原料にしたり、実は麻の実と称して食用にした。また麻油は家畜の飼料や肥料にもなり、捨てるのはほとんどなかった。インドで栽培される品種は麻酔性があり鎮痛、鎮静、睡眠薬などにも用いられている。

ヨーロッパで麻は運命の象徴とされ、麻の種子を蒔いて呪文を唱え、結婚相手を占ったり、古代ギリシャの巫女は、麻の一種である大麻から作った麻薬で、陶酔状態になりながら予言したり吉凶を占ったといわれている。

一方カラムシはイラクサ科の多年草で、本州、四国、九州の原野に生え、沖縄や福島県昭和村などでは今でも畑に栽培されている。高さは1~1.5mに達し、葉は長さ10~15cmの広卵形で互生し、先端はとがり縁には鋭い歯牙がある。夏から秋にかけて葉腋に淡緑色の花をつけ、雌雄同株で雄花は下部に、雌花は上部につく。和名の起こりはこの草から繊維を作る際、乾(カラ)を水に浸した後、筵をかけて蒸すところからカラムシになったとか、カラは唐、ムシは朝鮮語の「mosi」またはアイヌ語の「mose」から、カラムシといわれたなど諸説がある。別称はマオ(真麻)、コロモグサ(衣草)、チョマ(紵麻)などで、学名は『*Boehmeria nippononivea*』である。属名はドイツ人のG.R.ベームル氏に因み、種小辞は「雪のような」という意味で、英語では『China grass』、中国では『紵麻』と呼んでいる。

カラムシは茎からとった繊維が強靱で水に強く、縄文時代から釣り糸やロープ、網などに利用されていた。『日本書紀』には持統七年三月に、「詔(ミコトノ)して天の下をして、桑、紵(カラムシ)、梨、栗、蕪菁(アサ)等の草木を勧め植え令(シ)む」とあり、この頃から盛んに栽培されていたことが分かる。またこの植物の粗繊維を精製した糸で織った布が、上布と呼ばれるもので、越後上布、薩摩上布、奈良晒(サラシ)などが有名で、これを縮(チヂミ)としたものは、越後の『越後縮』が特に名高い。

麻を盛り込んだ諺や言葉もまた多い。「麻につる蓬」は麻のようにまっすぐなものの中に生える蓬は、自然とまっすぐに育つものだという意味で、善良な人に交わればその感化を受けて、善良になるというほどの意味である。「麻を荷なって金を捨てる」は、物を手に入れた喜びのために、前から持っていた大事なものを捨てることの例えで、目先の利にとらわれることを戒めたものである。「麻の葉」はお祓いの神具のことで、麻の葉をかたどり六角形状に六個の菱形を結びつけた染め模様のことをいう。「麻の箸」は盂蘭盆に魂棚(タマダナ)や墓などにささげる供え物に添える箸のことで、苧殻で作ったのでこの名がある。「麻苧」(アサノオ)は麻やカラムシの茎の皮の繊維で作った糸のことである。「麻蚊帳」は麻の繊維で作った蚊帳のことで、古くは『日本書紀』などに見ることができるが、当時は庶民のものではなく、蚊帳が一般的になったのは明治になってからのことである。



アサは雌雄異株で、これは雄株に咲いた雄花(栃木県佐野市)。



アサ畑(栃木県佐野市)。このあたりは麻を栽培する農家が多い。畑にはどこも栽培許可証が竹の棒の先に付けられている。これなしには栽培できない植物なのである。



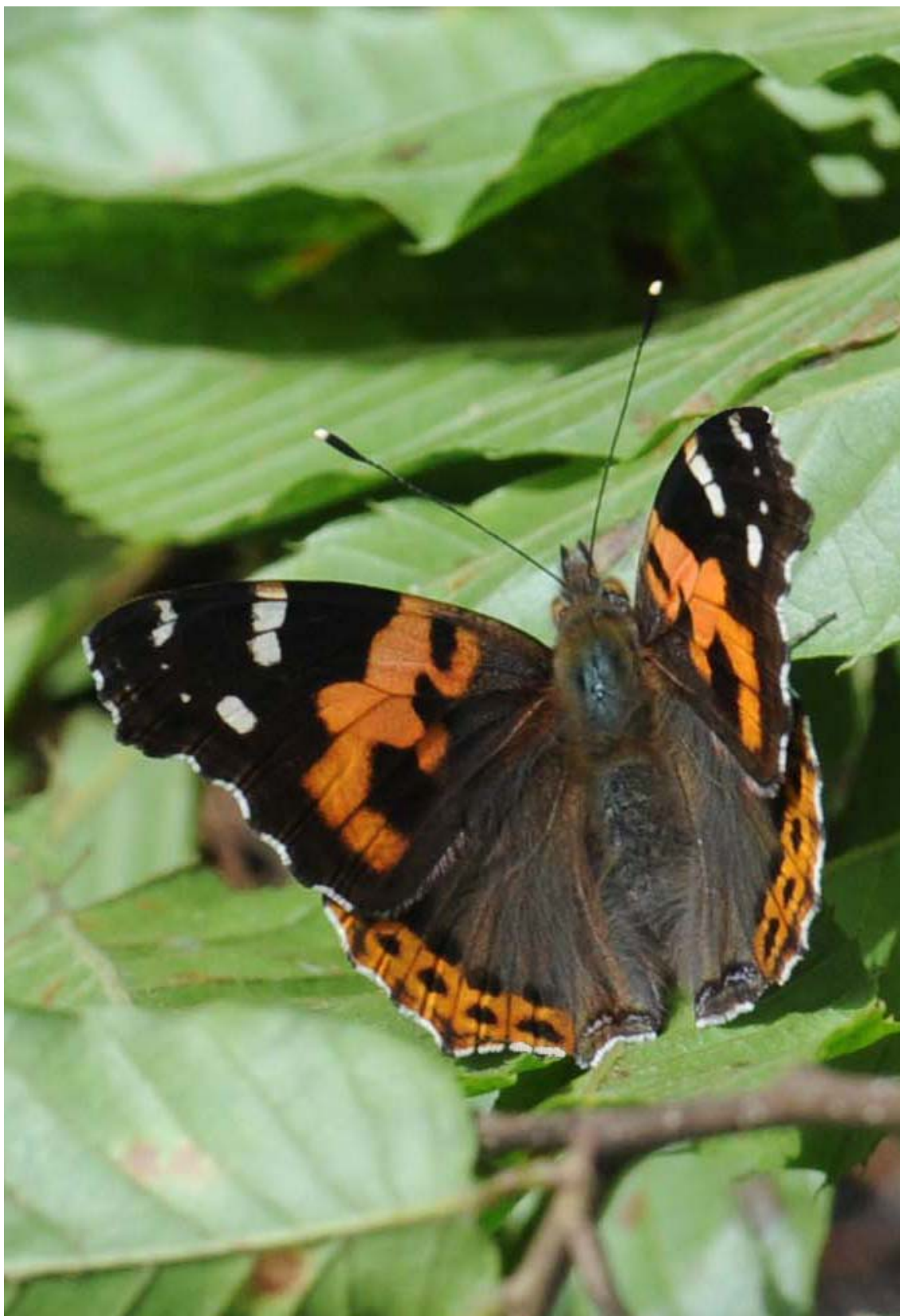
刈り取りを控えたアサ。機械を用いて一列ずつ刈り取って行く(栃木県佐野市)。



アサの刈り取り作業。左隅に見えている赤い機械が刈り取り用のものである。たまたま昼時で農家の人は食事に戻ったところだった(栃木県佐野市)。



カラムシからも昔は繊維をとって衣服に仕上げた(小石川植物園)。



このカラムシやアサ科の植物を食草にしている蝶がいる。このアカタテハで、秋 10 月頃によく見かけるが、翅をあまり広げてくれず、その美しさに触れるチャンスは乏しい。 [目次に戻る](#)